

鼻行類の夢

*Nasobema
tyricum*

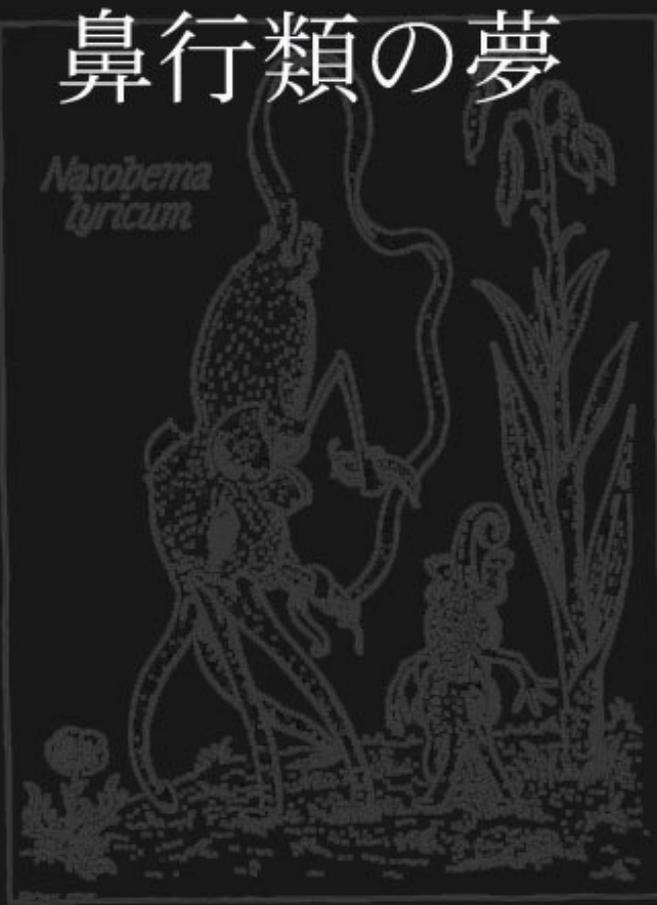


PLATE X

序章 ー 白金色の天井 (1)

人類が地球の重力圏から脱出を果たして数千年。

今や地球は大小無数のスペースデブリに包囲され、空は昼も夜も白金色の薄雲に覆われていた。

抜けるような青空と、煌めく満天の星空は、既に地球上からは消え去っていた。

煤けた太陽と色合いの悪い朧月だけが地べたを這う人々の顔をぼんやりと照らしていた。

衛星軌道上には、はるか昔に建造されたスペース・コロニーが存在し、その数は数十にも及んだが、既に定期便は絶え、航路は失われていた。そもそもデブリの厚い雲を通過できる船の建造技術すら失われていた。

ただ、コロニーとの唯一の通信手段であるマイクロ波通信(アナログ音声のみ)だけが宇宙へと生活の場を移した同胞達が健在である証であった。その通信局も、現在はたった1つとなっていた。

そしてある日、そのマイクロ波通信すら途絶えた。

最後の通信記録には、通信手の興奮した音声が残されていた。

『我々は、遂に地球外生命体との接触を果たした――』

序章 ー 白金色の天井 (2)

最後まで通信施設が健在であったコロニー、『アウナヴァッサ』は、静止衛星軌道からさらに遠く、約5時間で地球を一周する軌道上に存在するはずであった。

『アウナヴァッサ』は、コロニーの中でも大型のものに分類され、コロニー群の統制と、太陽系外の天体の観測という任務を与えられていた。後者の任務には地球生まれの生命体に移住可能な惑星と、地球外生命体、特に知的生命体の探索が含まれていた。

しかし、『アウナヴァッサ』の運用が開始されて500年、生物に移住可能な惑星は発見されたものの、未だ地球外生命体の発見には至っていない現状であった。定例通信の最初に行われる通信は、探索の経過報告であり、それも『現時点まで発見に至らず』というのが決まり文句であった。

そのようなやり取りが、高密度高速通信が使用不能になってから200年間、1日たりとも休むことなく続けられてきたのであった。

他のコロニーは、あるものは通信が耐えて捕捉不能になり、またあるものは空気漏れ事故から復旧できず、あるいはテロリストの破壊活動によって滅亡していった。

『アウナヴァッサ』と軌道が近い衛星が幾つかあり、そのうちの1つ、『サワビシ』は、『アウナヴァッサ』と同型のコロニーであったが、肉眼で観察した限りでは内部の照明設備が稼働しているのが確認できたものの、通信に応答せず、また太陽電池パネルの角度を修正した形跡も認められなかった。

いずれは自分たちのコロニーもそうした運命をたどるのかも知れない……『アウナヴァッサ』の住民たちは、そういった不安から逃れられずに居た。そうした現状から、地球外生命体の発見を心の拠り所としていた。

そして、将来に対する不安は、地球に残留した人々にとっても同じであった。

そんなぼんやりとした不安が地球上の空間を満たしている最中に、突如として届いた緊急通信は、地球上の全住民の陰鬱な気分を高揚させるのには十分なものであった。

そして、その後通信が途絶えるという異常事態に、人々は不安を感じるどころか、歴史的事件の予感にますます期待を高めていった。

.....しかし、その後1週間、さらに2週間と、通信が途絶された状態が続き、人々は次第に事態の深刻さを実感し始めた。地球外生命体の実態どころか、同胞の安否も不明な状況に、次第に人々は苛立ち始めていた。

そして通信が途絶えた日から数えて22日目。

北米大陸の南部、相変わらず白金色に鈍く輝く空に、1つの大きな黒い影が出現した。その影はゆっくりとした速度で南東方向へと進行し、その後大西洋上で北東方向に進路を変え、イギリス東部沿岸、北海上でその正体を現し、程無くして着水した。

付近住民が固唾を呑んで見守る中、その影、いや、宇宙船のような物体（全体は縦に引き伸ばしたラグビーボール状であり、全長は目測約200メートル、外壁は暗灰色の金属であり、目だった突起物は無く、円形の小窓が点在している）の横っ腹が開き、中から乗員が現れた。

その姿は――まるで老人のような姿の生物が2体であった。いや、見るからに2名とも地球人の老人そのものであった。

序章 ー 白金色の天井 (3)

彼らは国連の調査隊と接触し、自らが『アウナヴァッサ』の住民である事を告げ、調査隊に保護を要請した。

ロンドンの大学病院にて診察を受け、そこで彼らは事情聴取に向かった調査隊の隊員に向かい、衝撃的な内容を話した。

その内容は以下のようなものであった。

――我々は地球から見て白鳥座、NGC6992の方角、約70光秒の距離に宇宙船と思われる天体を発見し、調査を開始したところ、不規則性の認められるミリメートル波の発信を確認し、その天体が地球に向け進行中であることが判明した。

――その天体が地球外生命体の手による人工物であることを確信した我々は、積年の苦勞がついに報われる時が来たものと思い歓喜した。しかし――それは、地球外生命体の物ではなかった。

――それは、遠い昔、通信が途絶したコロニー、『サワビシ』の住民が移住の為に建造した宇宙船であり、その宇宙船は元々『サワビシ』住民が他のコロニーや地球に移動する為のものであった。

――『サワビシ』では、通信が途絶する少し前、コロニー自治を巡って複数の勢力による紛争が起こっており、それは次第に過激さを増し、見境の無い殺し合いへと変貌していった。

――紛争が終結しようとした頃には、もはや住民の過半数は殺害され、ことコロニーのハード管理関連に至っては、テロリストの標的にされ、多くの技術者たちが犠牲になり、あるいは持ち場を捨てて逃走してしまった。

――コロニーの維持が困難であると悟った『サワビシ』暫定政府関係者たちは、唯一生き残った大型コロニー『アウナヴァッサ』へと向かうことを決意。だが、猜疑心の強い彼らは、『アウナヴァッサ』の住民が易々と門戸を開くとは考えなかった。

――彼らは外宇宙からの宇宙船を装う為、一旦太陽系から離脱。その後、『アウナヴァッサ』に低速で接近し、わざとらしい信号波を発信した。それを捕らえ、慎重にコンタクトを図ってきた『アウナヴァッサ』が警戒を緩めた瞬間、侵略を開始した。

――突然の侵略劇は、1時間足らずで終わった。『サワビシ』移民は、主要施設を概ね制圧すると、自ら新政府を名乗り、『アウナヴァッサ』旧政府および住民の粛清を開始した。旧政府関係者や新政府に抗議する者達は悉く処刑されていった。

――そうした中、旧政府の公安当局者は事態を打開する為、制圧された施設への攻撃を開始した。攻撃は手段を選ばぬ物で、飲料水汚染、エアクリナー遮断、爆弾等、あらゆる手段でゲリラ攻撃を行った。

――そうしてコロニー内が混乱する中、ついに禁断の兵器が使われた。窮地に立たされた旧公安当局側は毒ガスによる無差別殺戮を開始し、新政府高官の居住区を民間人諸共皆殺しにした。

――毒ガスは、コロニーのエアクリナーを停止させてしまったため、排出されなかった。そのままコロニー中に広がり、ガスマスクが間に合わなかった人々も犠牲になった。そうして残った人々もほとんどが死んでいった。

――そうして生き残ったのが、我々2人のみである。我々は、『サワビシ』からやって来た宇宙船に乗り込んだ。そして、捕捉できる全てのコロニーが滅亡した事を確認し、我らの最後の同胞が生きる場所、この母なる大地にたどり着いた……

調査隊はこの内容をすぐさま国連本部に設置された対策室に報告し、そこから全世界に向けて発信された。

今ここに、宇宙に旅立った人類が壊滅し、人類が地球外へと旅出つ術が永久に失われた事が明らかになったのである。

序章 ー 白金色の天井 (4)

地球に居残っていた人類たちは、地球外生命体との接触手段を絶えず模索してきたコロニーの人々とは異なり、スペースデブリに囲まれて以降、地球外への脱出手段を失い、またその状況を打開するだけの技術も熱意も失っていた。実は、『サワビシ』の宇宙船が地球にたどり着いた事でもわかるように、デブリの雲を通過する手段はあったのだが、彼らはその技術を理解できず、またそれを解明しようとするしなかった。

地球に残った人類たちは、既に「老いてしまった」のである。

地球人は、今や白金色の天井の下に閉じこもり、生気なくその狭い囲いの中を彷徨い、ただ死を待つばかりの老人であった。地球は、照明の暗い巨大なホスピスに成り下がっていた。

そして彼らの子孫であるコロニーの住民たちが死に絶えた事を知ったとき、彼らは現世に全ての希望を失ったのである。

そして――現世に希望を失った人類は、物語を書き始めた。

誰に見せるわけでもなく、語ることも無く、ただ黙々と自らの妄想を書き残し、あるいはテキストデータとして記録した。

その物語は、非論理的で、科学的根拠に欠け、荒唐無稽なものばかりであったが、上記のような絶望の中で書かれたことを考えれば、一読の価値があるとは思えないだろうか？